
 学 会 記 事

第27回新潟画像医学研究会

日 時 平成4年6月27日(土)
午後2時～6時
会 場 新潟大学医学部 大講義室

演 題 1

1) 当科における経静脈性造影 CT 検査時の副作用の検討

高瀬 裕志・平山 昭平 (日本歯科大学新潟)
外山三智雄・二宮 秀一 (歯学部歯科放射線
江口 徹・前多 一雄 科)

近年、歯科領域でも CT 装置の普及が進み、歯科放射線科医が経静脈造影 CT を施行する機会も増えつつある。本検査は、歯科領域で行う他の造影検査と比較して、造影剤による副作用の発現頻度が高く、また、重篤な副作用の発現も予想される。そこで、造影剤による副作用について十分に検討しておく必要があると思われる。今回は、これまで当科で施行した経静脈造影 CT について、副作用の頻度、種類、処置とその予後を調べた。

対象は、1983年11月から1992年5月までに当科で経静脈造影 CT を行った 988 例で、造影剤はコンレイまたはオムニパーク 300 を使用した。造影剤の投与方法は、急速静注・点滴併用法を用いた。

結果は、当科における経静脈造影 CT 検査時の副作用は軽症の場合が多く、イオン性造影剤と比べ非イオン性造影剤では、副作用はさらに軽度となる傾向にあった。

2) 急性膵炎に合併した肝門部腫瘍性病変の

1 例

篠川 主・谷 達夫 (南部郷総合病院)
鵜飼 勉・佐藤 巖 外科
原田 武・八木 一芳
渋谷 隆・前田 裕伸 (同 内科)

急性膵炎症状を呈し CT で脾上縁から肝下面におよぶ腫瘍を認めた 1 例を提示した。症例は 69 歳、女性。胆嚢炎と高血圧の既往がある。家族歴では特記すべきことなし。平成 3 年 5 月 18 日夕食後上腹部痛、悪心、嘔吐出現し、5 月 20 日血清アミラーゼ：3278IU/L と上昇を指摘され急性膵炎の疑いで入院した。入院時 GOT, GPT,

LDH, ALP, γ -GTP, BUN, Cre の増加や尿蛋白も指摘された。ERCP では胆嚢の萎縮の他膵管の異常や膵胆管合流異常、結石はなく、Ga シンチでは肝両葉の腫大はあるが膵の異常集積はなかった。腹腔動脈撮影では脾動脈の不整像の他異常がなかった。CT では脾上縁から肝左葉下面におよぶ 6～7 cm の腫瘍を認め悪性リンパ腫が疑われた。平成 3 年 7 月 10 日開腹手術をしたが、同部には超母指頭大の壊死性の腫瘍しか認められず、病理学的にも良性で病因は不明であった。肝門部の病変は良悪性の鑑別、手術術式の決定上画像診断は極めて重要で今後も診断上注意すべき病変と考えられた。

3) 子宮平滑筋肉腫の 2 例

清野 泰之・安住利恵子 (長岡赤十字病院)
三浦 努 (放射線科)
須藤 寛人・安達 茂實 (同 産婦人科)

子宮肉腫の術前診断は困難であることが多い。この原因としては、ひとつには、症状・徴候が子宮筋腫のそれと類似していることであり、もうひとつには、腔部・頸管スメアが無効であることが多いことがあげられる。

今回我々の施設で、2 例の子宮平滑筋肉腫を経験し、術前の画像所見を検討することができた。MRI でも、信号のみからは、筋腫との鑑別が不可能であった。しかし、急速に増大する骨盤内腫瘍という臨床症状に加え、症例 1 では肺転移が見られ、症例 2 では、子宮と連続する細い茎を確認でき子宮肉腫と診断した。

画像診断は、病巣の進展度の把握や、腫瘍が子宮由来であることの確認に有効と考えられた。

4) CT による膀胱癌の示現と局所進展に関する検討

林 浩子・前田 春男 (新潟市民病院)
黒川 茂樹・横山 道夫 (放射線科)
大澤 哲雄 (同 泌尿器科)
渋谷 宏行 (同 病理)

平成 3 年 1 月より 4 年 3 月までの間に新潟市民病院泌尿器科に膀胱腫瘍で入院歴のある 27 名、のべ 44 CT 症例を検討した。前処置ではオリブ油注入法 24 例、造影剤希釈液注入法 14 例、前処置なし 6 例であった。それぞれ患者の体位、CT 画像上の腫瘍径、局在、局所壁進展を検討した。側壁病変は前処置の種類のいかに関わらず比較的小さな腫瘍まで描出れしたが、後壁病変は造影

剤希釈液注入法を用いると背臥位のままで11mm大の病変まで描出できた。CTでの局所壁進展で辺縁凹凸を示すものはリンパ節転移例や放射線治療を行なうケースが多かった。

演 題 2

1) 脊椎・脊髄外科における術中超音波診断の小経験

伊藤 拓緯・本間 隆夫
内山 政二・山崎 昭義
井村 健二 (新潟大学整形外科)

機材の発達にともない、手術中に超音波診断装置が簡単に使用できるようになり、脊椎脊髄外科手術の際にも行われるようになってきている。我々も十数例に術中超音波診断を行ったのでその経験を報告する。使用したのは、周波数7MHzのprobeで、観察は水浸法にて行った。我々の経験のうちまず脊髄腫瘍では、腫瘍の正確な位置および脊髄切開を行う部位の確認さらには切除範囲の確認に有用だった。脊髄空洞症ではshunt造設位置の決定や、複数ある空洞のshunt効果の確認に有用だった。後縦靭帯骨化症を初めとする脊髄症では脊髄の圧迫および変形の程度の観察を容易に行うことが可能だった。また観察した大多数の症例で脊髄に心拍に同期した拍動がみられたが、硬膜と脊髄の動きは独立していた。以前から脊髄手術の際に硬膜の拍動の有無が脊髄除圧の目安になるとされているが、肉眼での硬膜の観察は脊髄除圧の確認の手段にはならないと思われた。

2) 二次性上皮小体機能亢進症における頸部

エコー検査の有用性の検討

岡田 雅美・恵 以盛
下条 文武・荒川 正昭 (新潟大学第二内科)
谷澤 龍彦・高橋 栄明 (同 整形外科)

上皮小体は、機能亢進状態でも4腺全てが同様には腫大せず、非対称性で、術前診断はしばしば困難である。当科で経験した上皮小体摘出17例の内、定量的な頸部エコー検索を行った10症例について、手術所見との相関を検討した。平均年齢は46才、平均透析期間は約12年である。摘出されたのは計32腺であった。7.5MHzのプロープを用いて、腫大腺を確認後、断面最大長径と、直行する短径を計測した。

【まとめ】1. エコーで指摘されたのは76.3%に (29腺)

で、CTに(検出率55.3%)より高感度であった。実際に摘出された32腺に対する検出率は90.6%と極めて高かった。2. エコー計測長と、摘出された標本の計測値は有意に相関した(p<0.001)。3. エコー計測長と、摘出標本の重量とは有意に相関し(p<0.001)、臨床的な応用について、今後の課題であると考えられた。4. エコーでは、位置によっては大きさに関わらず描出不可能であり、CT、MRI等の併用も、従来どうり必要と考えられた。

3) 画像上、脊髄腫瘍に類似した腰椎々間板ヘルニアの1例

八木沢克則・奥村 博 (立川総合病院 整形外科)
中台 寛
遠山知香子・武田 和夫 (県立六日町病院 整形外科)
戸内 英雄

画像上、脊髄腫瘍に類似した腰椎々間板ヘルニアの1例を経験したので報告する。

症例：67才。女性。数年前から徐々に歩行時に両下肢痛が出現。3カ月前から歩行時痛が増悪したため当科を受診した。

MRIでは、L5椎体背側に、T1強調像で、椎間板と等輝度、T2強調像で、周囲が高輝度、中心が低輝度域の腫瘤が認められた。また、腫瘤はGdで強調された。

椎弓切除術を施行すると、腫瘍はヘルニアであり、病理組織診断では、大部分が変性した軟骨組織であるが、一部には肉芽組織が混在していた。

本症例のように陳旧性の巨大な脱出ヘルニアは、脱出した椎間板組織の中へ周辺から肉芽組織が入り込むため、脊髄腫瘍に類似した像を呈すると考えられた。

演 題 3

1) ベーチェット病にてシクロスポリン長期投与中に脳トキソプラズマ症を併発した1例

滝川 真吾・出塚 次郎
小野寺 理・中野 亮一
米持 洋介・田中 恵子 (新潟大学脳研究所 神経内科)
辻 省次 (同 脳研究所 実験神経病理)
高橋 均 (同 眼科)
阿部 達也 (同 歯学部歯科 放射線科)
伊藤 寿介 (同 脳研究所脳外科)
阿部 博史

ベーチェット病で3年間シクロスポリン投与を受けた